

『花の縁物語』の作中歌

——恋の表象とそのはたらき——

恋物語のなかで、和歌は、登場人物の心情を凝縮し、端的に表明するための重要な道具である。仮名草子『花の縁物語』（以下『花の縁』）には九首、御伽草子『鳥部山物語』（以下『鳥部山』）には十五首の和歌が配されている。稚児物語の後者と、それを男女の恋に改変した前者は、きわめて近い関係にある。筋書きは一致しており、文体も、部分的な章句の相違はあるが、全体としては「剽窃」と指摘されるほどに、同一描写・類似表現が多い。たとえば男主人公の上京前夜の場面は、次のように描かれる。

比は夏立はじめなれば。木ミの梢もしけりあひて。いと涼しげなる、宵のまの月も。やがて草葉にかくれ行。むさしのなごりもおぼえて。紫のゆかりあるは。なにくれと跡の事など云。こしらへぬるうちに。

（『花の縁』）

ころは夏たつ、はじめなれば、木木の梢もしけりあひ、庭

『花の縁物語』の作中歌

富田 成美

のちくさも、いろそへて、いとすゞしげなる、宵のまの月も、やがて草ばにかくれ、むさし野のなごりおぼえて、むらさきのゆかりあれば、あとの事など、なにくれと、いひこしらへぬるうちに。

（『鳥部山』）

しかし、このようななかでも、出会いの場・恋文・逢瀬・和歌・道行・結末の自害などについては、わずかに『花の縁』の独自性が指摘されている²。なかでも和歌は、歌数が約三分の二に削減されただけではなく、その表現もすべて異なる。同一の和歌は一首もない。自害（『花の縁』から通世（『鳥部山』）へ設定を変更した結末とともに、もともと大きな改変と言えよう。

『花の縁』の和歌について、田中伸氏³は、「それぞれの歌を、その場その場にふさわしく新作したというより、『鳥部山物語』の歌の想によって、個々に改作して、『鳥部山物語』の想を受継いでいる」と判断する。しかし、これだけでは、それぞれの和歌の傾向や、作品中の意味が明確にならない。また、和歌を削除すること

の意図や効果も説明できないのではないか。その一例が旅の場面である。『鳥部山』では恋人との別離の悲しみや彼への愛情を、道中の詠歌に凝縮させていた。『花の縁』ではそれらの和歌を廃し、『鳥部山』とは直接関係しない古歌を「道行文」に組みこんだ。

また、和歌の心情を散文化した。これによって、『鳥部山』の主人公の悲痛な内奥が希薄化され、代わりに机上の名所遊覧的な気分が創出されることは、以前に述べた。原作の想を逆転させ、異質な情感を導きだす措置は、「旅」だけの現象であらうか。

『鳥部山』も『花の縁』も、和歌は、恋の導き・相聞・別離・哀傷と、四種の情況下で詠まれる。どちらも作中歌のほとんどは、恋心の表出に使われる。すべての歌で歌想が共通しているならば、どの場面でも、同質の恋の情感が和歌によって導かれることになる。本稿では各歌の比較解釈によつてこれを再検討する。そして、そこから、『花の縁』の和歌に見られる恋の表象の特徴と、その効果の考察を試みたい。

なお、作中歌の本歌・引歌・類想歌と考えられる和歌は、管見の範囲ではほとんど推定することができなかった。また、作中の人物名は、「左京」「娘」「花の縁」、「民部」「藤の弁」(『鳥部山』)で統一する。

一、恋の導き——垣間見の詠歌

『花の縁』でも『鳥部山』でも、男主人公は観桜の場で恋にお

ちる。そして、その俳を求めて洛中を彷徨し、とある邸に迷い込む。そこで主人公は意中の人を偶然垣間見る。その人は「ちり過たる花の梢をながめおりて」(『花の縁』⁵)、次のように歌を詠む。

ふめばおし、ふまでは人の、とひがたみ、風ふきわけよ
花のしら雪

とよみし、ふることを、口すさひながら。そばなる高欄にそとよりかゝりたるけはひ。そゞろに心をつくし。夢にもせめてと、恋したひし。東山の、はなのえにし。露まがふべくもあらず。

『花の縁』

うつろひて、あらぬ色香に、おとろへぬ、花もさかりは
みじかかりけり

と、くちずさみながら、そばなるかうらむに、そと、よりかゝりて、つらづえつき給へるさま、はたさむきまでなむおぼへける。つく／＼と、うちまもれば、夢にもせめてと、恋したひし北山の花のえにし、つゆまがふべくもあらず。

『鳥部山』
(傍線筆者。以下同じ)

『花の縁』でいう「ふること」は、『続後撰和歌集』巻三「春歌下」「ふめばをしふまでは人もとひがたみ風ふきわけよ花のしらゆき」(右大臣)を指す。庭一面に散った桜の美しさを愛で、それが荒らされることを惜しむ歌である。ここに詠われた「人」

が誰かは明確にならないが、人の訪れを誘うような歌である。それを『花の縁』に延用した場合、「人」には特定の意味が込められる。「娘」は、この段階では、自分が「左京」に恋されているとは気づいていない。また、特定の人に恋心を抱いてもいない。

したがって、「娘」の側からこれを「左京」に向けて詠みかけることはしない。そのため、当該歌は、『続後撰和歌集』以上の意味はもたない。しかし、読み手には、特定の誰かを誘う雰囲気をもった歌と解されるのではないか。この場合は「左京」である。『鳥部山』では、「民部」は詠歌する少年が「北山の花のえにし」と気づく前に、その美貌にひかれて「つくく」と、うちまもる。

『花の縁』にはその詞章は存在しない。「左京」は一目見た瞬間に、「東山」の美女であるとわかる。当該歌は、女のもとへ男を引き寄せ、恋を発現させる力をもつと考えられる。

一方『鳥部山』には、典拠となる古歌は推定しがたい。花の盛りの短さに、人の色香の衰えを重ねて詠む。無常やはかなさを感じさせる歌であり、恋を誘発させるような要素はない。この相違は、両作品の冒頭とも合致する。『鳥部山』の「とにかくに、つねならぬ物は、此世なり」が無常観を示し、『花の縁』の「世の人の心まどはす事。色欲にしかず」が好色憧憬を示すことは、以前に述べた。これらは作品全体の基調を示す。作中和歌も同様である。後に男主人公の恋人となる相手から発せられる最初の和歌には、恋への希求や好色の肯定『花の縁』と、露の世への嘆息『鳥部山』という、異質な感性がこめられている。これは『花の縁』の改作が、

『鳥部山』とは異なる世界をめざすことを示す姿勢でもあらう。

二、相聞——恋歌の贈答

①第一の恋文

男主人公は恋の病を癒すために、恋人の隣家に転宅し、「仲立」を得て文を贈る。『花の縁』では、次のような恋文が交わされる。

ほのみつる、花の木陰を、過しより、露けき袖を、ほし
ぞわつらふ

田子のうら浪、立ぬにくるしき、心のほどを。かつ、をしは
かり給へ。

(「左京」)

千々にさく、花にとめこし、心をば、いつれの色と、え
こそわかたね

(「娘」)

『鳥部山』では以下の恋文を贈答する。

すぎがてに、よその梢を、見てしより、わすれもやらぬ、
花のおもかげ

月の夜も、しほのひるまも、なみかせの、たちゐにつけて、
かはかぬは、をしまのあまの、袖ならでも。

(「民部」)

見えしより、わすれもやらぬ、おもかけは、よその梢の、
花にやあるらむ
(藤の弁)

これらの和歌について、田中氏は、男の贈歌は『花の縁』のほうが平易であるが、和歌の優劣はほとんどないと言う。優劣はともかく、表現技巧の点では、必ずしもそうは言えない可能性もある。たとえば『花の縁』の贈歌のように、「花」(春)と涙に濡れた袖をとりあわせた古歌は、ほとんど存在しない。草木を紅葉させる「露」は、一般には秋の景物とともに詠まれる。『花の縁』で「花」が出されるのは、『鳥部山』の手紙文にある「かはかぬは、をしまのあまの、袖ならでも」の部分で、下句に組みこんだためであろう。そのため、和歌と手紙文は、「あまの袖——ほす・うら浪」という点で関連ができる。『鳥部山』では、和歌と手紙文は直接関係はしない。その点では贈歌も、『鳥部山』の歌想をふまえただけ、『花の縁』のほうが技巧的であると言える。

『花の縁』は「あなたを一目見て以来、恋の思いに泣き続けている」意を詠み、『鳥部山』は「一目見て以来、あなたのおもかげが忘れられない」意を告げる。『鳥部山』には「一目惚れ」の印象深さが強く示されている。手紙文は、『花の縁』では「立つにも居るにも苦しい恋の心」を、『鳥部山』は「昼夜をわけず、立ち居につけて恋の涙を流し続ける」状態を表す。『鳥部山』のほうが、苦悩のさまが強調される。『花の縁』の下句と『鳥部山』の手紙文とは同想である。片恋の苦しさを、『花の縁』では、傍

線で示したように、上句・下句・手紙と三種の表現で示している。『鳥部山』では、和歌と手紙の二種である。「花のおもかけ」と、「月の夜も、しほのひるまも」という時間の観念が明示されるため、「わすれもやらぬ」心情は、『花の縁』よりも明確になる。

ただ手紙の詞章は、御伽草子・仮名草子では、手紙文や道行文に頻繁に使われる常套句である。「君が心は 白浪の 立居苦しき 思ひをば」(『竹斎』『夷男』の恋文)「田子の浦波夜昼となくなき明したる浜千鳥」(『薄雪物語』『男』の恋文)「潮汲むあまの衣ほす間もなきわが袖かなとあらそひて」(『小町草紙』道行文)など、類似の表現も多い。その点では、類型的に恋の苦しさを示す以上の意味は薄いと言える。

次に恋人の答歌である。田中氏は『鳥部山』は平淡で、『花の縁』はそれよりも技巧的であると言う。また、『花の縁』は贈歌を受けて答歌を詠むという贈答歌の形式をふまえていないことも指摘する。確かに『花の縁』の詩句は対応していない。しかし、問題は形式の照応や技巧よりも、和歌の内容ではないか。

どちらも拒絶の歌である。それが本心ではないことは、直前に記された「我も岩木ならねば、あはれとはおもへども。人目の、つゝまじさにこそ」という文辞にも示される。拒否の理由は、「多数の花にとどめてきたあなたの心は、どれがほんとうの思いか、区別することができない」の歌意をもつ『花の縁』では、「左京」の真意が自分にあるか他人にあるかわからないからである。贈歌では「娘」を象徴していた「花」を、ここでは多数の女性の意

味に転じる。それによつて、男の浮気心をからかう雰囲気をもたせている。

『鳥部山』は「一目見たときから忘れられなくなったというおまかげは、私ではなく、他所の花、つまり他人ではないか」と詠む。贈歌の「わすれもやらぬ、花のおもかげ」は、「藤の弁」自身であった。答歌ではそれが他人の意味に置換され、男の人違いを言う。これは『花の縁』同様に、男の浮気心への揶揄とも考えられる。ただ『花の縁』ほど明確にはならない。『花の縁』では「千々にさく花」のなかの「いつれの色」と、明らかに不特定多数の女性から一人を選ぶことを意識している。『鳥部山』の「よその梢の花」は、単数の他者である。『花の縁』のほうが「恋の遊び」の感覚が濃厚であると言ふことができる。

ところで、恋人は最初は返歌を拒否する。『花の縁』では「かやうのこと、ならは」なかったからであり、『鳥部山』では「たゞいつはりの人の世に、行衛もしらぬあた人」からの恋文であったためである。ここには思いをかけられた側の恋に対する姿勢がうかがえる。『花の縁』は経験がなかっただけである。恋を忌避しているわけではない。『鳥部山』は恋そのものを厭う。この相違は答歌の内容にも反映されている。『花の縁』では恋に対する憧憬が、男の心情を浮気心と解釈させる。『鳥部山』が「よその梢の花」としか詠めなかったのは、「藤の弁」が恋に懐疑的だったからである。贈答形式の順守は、この場合は恋への消極性を示す要素となる。逆に『花の縁』では、形式は破綻しているが、そ

のことが女性の側の恋に対する積極性を強調する。贈歌に苦悩の色が薄いこととともに、これは『花の縁』の好色への志向を示す考えられる。

②第二の恋文

意中の人からの返事にますます恋心をもやす男は、重ねて恋文を書く。『花の縁』の第二の贈答は次のように行われる。

心にて、しめゆひそめし、はつ草を、いかでか露の、を
きまがふべき

たもとのかずは、みしかども。わきて思ひの色は。梢にかは
す、風につけても。

(「左京」)

女も、はや心たゆみて

初草の、うらなくおもふ、色見えて、露のかごとくも、む
つましきかな

何事もく、あしからぬやうに。

(「娘」)

『鳥部山』の贈答は以下のとおりである。

ちりもそめず、咲ものこらぬ、おもかけを、いかてかよ
その、花にまかへん

たゞおほかたの、色香ならねは、まかふへくもあらぬを、い

かなるかせの、つてにも……。

(民部)

よしや人も、もりきかむは、中／＼なれと、とにもかくにも
とて

はつかしの、もりのことは、もらすなよ、つめに時雨
の、いろにいつとも

何事も／＼、あしからぬやうに。

(藤の弁)

『花の縁』の贈歌は、「心でしめを結い自分のものとした初草を、露が他の草とまちがえないように、どうしてわたしもあなたを他人とまちがえたりするのか、決してまちがえない」と詠む。

『鳥部山』は「散り始めもせず、咲き残りもしないあのとときの桜のおもかげを、他の花にまちがえることがないのと同様に、わたしも美しいあなたを他人とまちがえることはけつしてしない」と詠じる。どちらも、「真実の恋なので、相手を違えるはずはない」という男の誠心を表明する歌である。「しめゆふ」対象が唯一の恋の相手であるという意味では、『花の縁』は、『玉葉和歌集』『をみなへしわがしめゆひし一もとの外に心をうつさざらなむ』(巻十九「釈教歌」前大納言長雅)と同じ歌想をもつ。「しめゆひ」「おきまがふべき」という表現は、対象を占有したいという男の意識を示している。心情は「ふた葉よりわがしめゆひしなでしこの花のさかりを人にをらすな」(『後撰和歌集』巻四「夏」よみ人しらず)につうじる。『鳥部山』は第一の恋文での「藤の弁」

の答歌を受けているので、前歌の語を使用するという表現上の制約はあるものの、相手に対する独占意識は感じられない。

また、手紙文でも、『花の縁』の「たもとのかず」「わきて思ひの色は」の表現は、「多数の女性のなかからあなたを選んだ」という感覚をもつ。「娘」を絶対視する「左京」の心理を示す修辞と言える。『鳥部山』の「た／＼おほかたの、色香ならねば」には、相手への思いは漠然としか示されず、特別視意識は薄い。これらの点で、『花の縁』は、唯一のひとの恋を成就させる願望を、和歌にも文にも直截的に詠みこんでいると言えよう。

答歌にも、恋に対する意識の違いが見られる。『花の縁』では贈歌を受けて、「あなたの隠し立てない心が見えたので、はかない恋の恨み言も慕わしく思われる」と詠む。当該歌は『伊勢物語』第四十九段の「妹」の答歌(初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな)にもとづくと考えられる。『伊勢物語』は、愛らしい妹を見て結婚できないことを惜しんだ「男」に対して、「妹」が兄妹としての情愛を歌に託する。『源氏物語』「総角」帖でも、この話を引いて、「匂宮」と同腹の妹「女一宮」との間で、同じ歌の贈答が行われる。応酬の興趣を楽しむ挿話である。どちらも「妹」は「男」(兄)との契りを拒むが、『花の縁』はそれを男女の愛情に転換し、歌意も承諾に変える。恋の帰結が逆になっているのは、章段の内容よりも、恋物語としての『伊勢物語』『源氏物語』の情感を、作品に導入しようとしたからではないか。「女も、はや心たゆみて」の前文からは、二度の恋文で、

「娘」の心は完全に男に靡いていることがうかがえる。古典の情趣との重層は、『花の縁』に、実兄との契りを彷彿とさせる妖艶な恋の雰囲気を醸成させる。それは前文や和歌に示された恋に積極的な女性の態度を、さらにひきたてる効果がある。

ところが、『鳥部山』の「藤の弁」の心情は異なる。「藤の弁」は「時雨で紅葉するとしても、羽束師の森の木の葉を散らさないように、私の恋心が表れたとしても、恥ずかしい恋の言葉を他人にもらさないでほしい」と詠む。「よしや人の、もりきかむは、中／＼なれと」の前文や歌意からは、恋の露見をはばかる心情がうかがえる。「もりのことのは」を「もらす」ことを厭う心は、「ちらすなよ忍ぶのもりのことのはに心のおくのみえもこそすれ」(『題林愚抄』恋部二 入道二品親王尊円)「人しれずおもふ心をちらすなとけふぞいはせのもりのことのは」(『歌枕名寄』大和国三「岩瀬森」などにも見られる。秘めた思いの漏出を忌避する心理は、『鳥部山』にも想がつうじる。「藤の弁」は「とにかくにも」と「民部」を受け入れる決心はしたものの、最後まで「あなた」との恋を「うき名」とする恐れを残している。また、『鳥部山』は贈答歌としての照応をなしていない。第一の恋文とともに、両作品では、贈答の形式は重視していないようである。二度の恋文の贈答とおして、『花の縁』と『鳥部山』には、恋の受容態度に対象的な相違が見える。『花の縁』の積極的な恋愛肯定の意識は、原作からの大きな転換と言えよう。なお、両作の恋文は、すべて和歌だけか、和歌に短文を添えた形式である。

『花の縁物語』の作中歌

御伽草子にはこのような恋文は多い。しかし、仮名草子の恋文は、美辞麗句を連ねた長歌形式(『うらみのすけ』『竹斎』の「夷男」「露殿物語」をぐら物語)『ねごと草』など)や、美文とともに和漢の故事・逸話を引用した形式(『薄雪物語』『薄雲恋物語』など)が主体である。したがって、恋文の形式では、『花の縁』は御伽草子の枠からぬけ出てはいない。

三、別離——別離の悲哀

① 最初の後朝

恋文を交わし「日比を過し」て、二人は逢瀬をとげる。その後朝は次のように描かれる。

なにのつらさにか。はや、わかれをいそぐ、鳥のこゑく
打しきりければ。よに逢坂のせきも、いかでかはと。引わか
れぬる、きぬくの。袖のなみたも所せく。夢のたづちに立
帰りぬ。
(『花の縁』)

何のつらさにか、わかれをいそぐ、八こゑの鳥も、はやこ
ゑくに、うちしきは、をのか音に、つらきわかれのとう
ちわひて、引わかれぬる衣くの、袖のなみたも、所せく、
おほえけるに、有明の月の、かたみかほなるも、なをかきく
らす心ちして

おもかけよ、いつわすられむ、有明の、月をかたみの、今朝のわかれに

と、むせかへれば、君も、たくひなきあはれに

かきりとて、たちわかれなは、大空の、月もや君か、か
たみならまし

と、たかひに、かへり見かちにて、たちわかれぬ。『鳥部山』

『花の縁』には和歌の贈答が存在しない。また、美文調の表現は当該作に独特のものではない。次のように、御伽草子・仮名草子に類似するものは多い。

夜もやうくふけ、八声のとりもつげわたる。ぎおんしやうじやにあらね共、かねのひゞきもうらめしや。こよひばかりはしばしたゞ、千夜が百夜につもりきて百夜が十夜にならばやと、あまのいはとをたてこめて、いちごはやみにもなりもせでと、思ふそのまにしのゝめのよこぐもなればあけやすし。はやきぬぎぬのそでなれば、たがひに名残のおしやられあはれ也。

『うらみのすけ』

この後には、次の逢瀬についての涙ながらの問答が展開する。「夜もうすくふけ、きぬぎぬなりし折しも」『和泉式部』のように簡潔な場合もあるが、後朝の場合は、和歌や文章で、別れの辛さを述べることが多い。そこに作品独自の感性がこめられる。

「今有明の月を形見として別れるが、月のようなあなたのおもかげは、いつ忘れることができるだろうか」（民部）「今を限りと別れてしまったならば、大空の月さえもがあなたの形見となるでしょう」（藤の弁）の贈答は、「月をかたみの別れ」に、前夜の契りのはかなさを感じさせる。この情感は『花の縁』にはまったく摂取されていない。「をのがねにつらき別の有りただにおもひもしらで鳥や鳴くらん」（『青蛙抄』巻六「雑談」など）を元歌とする「をのが音に、つらきわかれの」の引歌部分と、和歌の削除によって、『花の縁』は原作のもつ悲哀感を希薄化することができた。それは一方で、類型的なだけの情況描写が、『花の縁』独自の別離に対する心情を捨象してしまうことにもつながる。

②最後の逢瀬

幾度かの逢瀬のあと、男には帰国命令が下る。最後の逢瀬が果てるとき、男はその心境を月に託する。

月ほのかに、南の窓より、さし入を見て、おとこ。
佛の、かはらぬ月に、おもひ出よ、ちきりは雲の、よそ
になるとも

とある哥を。こゑおかしく、うたひすさひければ。女も、いと、したはしげにて。同しかきりの、命ならずはと。なきしづみたる、けしきを。みるに。左京、命にかへても、しばし、とゞめまほしき、今のわかれば。千夜を一夜に、なせりとも。

猶あくまじきに。

『花の縁』

月かけの、ほのかに、みなみのまとより、さし入を見て、
民部

いかばかり、月にはかけの、したはれむ、くもる夜半さ
へ、わすれやらしを

と、さくりもよと、とゝめかたきを、弁の君も、いとし
めりたる、まゆをしのこひ、とはかり見やりて

いかにせむ、なみたの雨に、かきくれて、したはむ月の、
かけもわかねは

おなしがきりの、いのちならずはと、いのちにかへても、し
はしとゝめまほしき、いまのわかれなり。されは、むかし
かりにも、千夜を一夜にといひしも、さる事なり。『鳥部山』

別れのぞんで男が和歌を吟唱することは、恋物語には多く見
られる。一、二の例をあげる。

いとおしさのあまりに、余助涙をうかべて、

忘るなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふ
まで

といふ古歌を吟じて、振り袖の下より手をしめなどして、立
ち別れんとすれば……。

『ねごと草』

おとこ。あまりの、かなしさに。ひとりごと

あかつきのなからましかハしら露のをきてわびしき別せ
ましや

と。吟じて。なくく、立ち出るに。

『をぐら物語』

どちらも主人公は、別れの悲しみに涙し、そのあまりに和歌
を吟じる。それに対して、「左京」は「こゑおかしく、うたひさ
する」。これは別離の場面にはそぐわない雰囲気ではないか。和
歌の内容も、『ねごと草』は、遠く離れても再会まで互いを忘れ
ないことを願う。『をぐら物語』は、二人を隔てる夜明けを恨む。

『花の縁』は、疎遠になつても、月に自分の俤を思い出すことを
相手に望む。「雲のよそ」という表現は、距離的に離れることだ
けをさすものではない。「あまくものよそにも人のなりゆくかさ
すがに目には見ゆるものから」(『古今和歌集』巻十五「恋五」、
『伊勢物語』第十九段)「むささきのくものよそにや思はましす
てぬちかひのかからざりせば」(『新撰和歌六帖』第五帖「むら
さき」)などに見られるように、心理的に疎遠になつた状態をも
指す。そのため、永久の別れになる可能性をもつたこの場面で、
男からそれを言いだすことは、彼に別離の悲しみや恋の契りの確
認の意識が弱いことを感じさせる。それは「命にかへても……」
と表される男の悲嘆とは、整合がむずかしい。

また、「うたふ」という行為は、和歌を「詠じる」と同等質
ではない。『もとのもくあみ』では、太夫「高尾」が「歌をこそ

は詠じ」る「哥の会」と、謡や流行歌謡を歌う酒宴とは、明確に区別されている。後者は次のように描かれる。

数杯の酒の御肴と、禿は扇おつとり、立ち出て、あらあら
おもしろのぢしゆの花の景色やと、うたひかなで興をなす。
もくもこれにうかれつつ、我しらず小声になり、山寺の春の
夕ぐれなどと、ふるひふるひぞ歌ひけり。

このような酒宴は、『うらみのすけ』での「雪の前」の宴席、『竹斎』の「北野社」での「内裏上臈衆」の席や「遊女遊君」の集まり、『ねごと草』の「余助」と「松風」との逢瀬、『をぐら物語』での「篠之丞」と「初花」との逢瀬など、仮名草子には多い。「うたう」は、遊宴につながるような華やかさや楽しさの感覚をふくむ。したがって、歌意からも、それを歌う情況から、当該歌は、別れの場に破調をもたらす可能性があるのではない。

一方で、恋人が嘆く「同じかきりの、命ならずは」は、「いかげせんしなばともにおもふみにおなじかぎりのいのちならずは」(『新撰和歌六帖』第五帖「あひおもふ」)の下句をとっている。これも『続古今和歌集』ほか多数の歌書に載せられる著名な歌である。死ぬならともにと思っている、それが叶えられない身の上を嘆くこの歌は、恋人の帰国という事態を開する手段をもたない「娘」の悲痛な思いを代弁している。「左京」の歌とはちがって、場面にふさわしい女性の心理を表出していると言えよう。

『鳥部山』では、「民部」は「陰が月を慕い、曇りの夜半さえ月を忘れることができないように、あなたが忘れられない」と詠む。『花の縁』とは異なり、相手に対する思いを直接詠みこむために、恋慕の情はより明確になる。悲嘆を希薄化するような表現もない。また、「藤の弁」の歌も存在し、贈答形式をもつ。

別れの場面で歌を交わすことは、物語の伝統である。「雨のように流す涙のために、慕うあなたの顔も見えない」と嘆く答歌は、「おなじかきりの……」の古歌とともに、「藤の弁」の悲しみを増す。それだけではない。「命にかへても、しはしとめまほしき、いまのわかれなり」は、『花の縁』では「左京」の心情である。それは元来「藤の弁」の心理として配されたものであった。

「いとしめりたる、まゆをしのかひ」も加えると、『鳥部山』では、傍線のように、四種類の表現を使って、残される側の悲嘆の情を描く。『花の縁』よりもはるかに強い。悲しみの増幅によって、この場面は、永久の別れの苦悩を徹底することができる。また、悲しみは「藤の弁」の「民部」に対する恋情を示す要素でもある。それを詳述することで、『鳥部山』は恋される側の心情を明確にし、双方向性をもった恋の場を創出している。

これらの措置は『花の縁』には継承されていない。『花の縁』は贈歌に遊宴の雰囲気を持ちこみ、答歌を削除し、残る者の悲しみを男女二人の心情に分散させる。これによって、「娘」の嘆きは希薄化される。それだけではなく、場面全体としても、永遠の別離を予感させる悲痛な情感が醸化されている。

③ 恋人の恋慕

男主人公が武蔵へ帰国した後、京では残された恋人が、去った男を「独心にこひかなし」み、月を眺めて歌を詠む。

袖のうへに、やどすもうれし、我おもふ、人もやみてし、
すゑの月かけ
『花の縁』

詠めやる、夕部の空そ、むつまじき、おなし雲井の、月
とおもへは
『鳥部山』

『花の縁』は、袖にあたる月光を恋人が見る月であると嬉しく思
い、『鳥部山』は夕べの空を、恋人が見る月が出ると慕わしく感じ
る。どちらも自分が見る月は去った男が見る月と同じであると考え、
男を慕う歌想は共通する。しかし、月に対する思いは異なる。

『花の縁』は、「くもらばくもれと、うらめしながらも。さす
がに又したはれて」の詞章が、和歌の直前におかれる。「くもら
ばくもれ」の句は、恋の和歌にも多く用いられるばかりではない。¹⁷
待つ恋を嘆く歌謡にも使われている。「とはれぬ程は、くもらば
くもれ、つみにうつさむ、袖の月影」(『隆達小歌』第一二五歌)
などは、「袖のうへに……」歌と想が似ると考えてよいであろう。
叶わない恋や、恋人への思いを喚起させる存在への恨みなど、恋
慕をより増幅させる恋の焦燥を表す章句である。これによって、
『花の縁』には、歌謡の世界の艶麗さも重なることになる。

『花の縁物語』の作中歌

この句は『鳥部山』には存在しない。『鳥部山』は、同じ部分が、
「かたみもいまは、あたなれと、うらめしき中にも、さすがにま
た、したはれて」となっている。「かたみもいまは、あたなれ」の
箇所は、最初の後朝での贈答歌のそれぞれの下旬「月をかたみの、
今朝のわかれに」(民部)「月もや君か、かたみならまし」(藤の弁)
を指す。「くもらばくもれ」の艶かしい焦燥と、初めての別れの回
想では、同じ「うらめしき」であつても、そのニュアンスは異な
る。「藤の弁」の「うらみ」は、はかない過去に対する悲哀である。
一方「娘」のそれには哀感はない。深窓の上臈でありながら、清
水で女性だけの酒宴をはり、三味線を弾きながら流行歌謡を歌う
「雪の前」(『うらみのすけ』)や、賀茂社で見そめた美男に「うて
うてんとなり」、彼を探して上京する「薄雲の前」(『薄雲恋物語』)¹⁸
につうじる奔放さがあると言えよう。

また、『花の縁』の「月かけ」を「袖のうへにやどす」という
表現は、「月光を袖に受ける」の意である。¹⁹この場合「我をおも
ふ人」が見る光は、男自身の形代でもある。この感覚と行為は、
思う男との心情的一体化への願望を連想させる。したがって、「く
もらばくもれ」の情念とあいまって、当該歌は、作品の好色志向
の一端を示すと言えよう。

四、哀傷——死別の悲嘆

① 恋人の絶筆

恋人の危篤の報に再度上京した男は、その邸で死去を告げられる。曹司に残る歌を記した扇の手跡が男の涙を誘う。「明暮、手習をのみ、こととし」ていた恋人の絶筆であった。

傍をみれば、なれたる扇に、色々の哥とも書たる中に
ながらへて、なにを命の、頼むらん、おなじ世しらぬ、
中の月日に

といふ古ことを、かけるけはひ。もはら、いたうよはりたる
折ぞとおぼえて。もじのかたちも、さだかならず。『花の縁』

また、かたはらを、見れば、なれたる扇に、こひむなみだの、
いろそゆかしき、なといへる、ふる事とも、かす／＼にかきて
日かけまつ、露のいのちは、おしからて、あはてきへな
む、ことそかなしき

と、かける筆のあとも、いたうよはり給へるおりそと、お
ほへて、もしも、さだかならず見ゆ。『鳥部山』

『花の縁』の「古こと」は、「ながらへてなにを命のたのむら
んおなじ世しらぬ中の月日に」(『題林愚草』恋部二「絶久恋」
為道朝臣)を指す。恋しい男との再会を果たさずに死を迎える心
情が、「あなたに逢えないならば、この世に長らえて何になろう
か。命に未練はない」と、激しさをもって描かれる。

『鳥部山』の扇に書かれた「こひむなみだの、いろそゆかしき」

は、一条天皇に残された皇后定子の遺詠「夜もすがらちぎりしこ
とをわすれずはこひむなみだのいろぞゆかしき」(『後拾遺和歌
集』巻十「哀傷」)の下旬である。「終夜の契りを忘れないなら
ば、わたしを恋い慕って泣くあなたの涙の色が知りたい」の歌意
は、自分の命への未練とは異なり、最愛の人への愛執が強く出さ
れる。この歌は『後拾遺和歌集』だけではなく、『百人秀歌』『古
来風林抄』『悦目抄』などの歌書・歌字書や、『栄花物語』『宝物
集』『発心集』『世継物語』『十訓抄』『無名草子』などの物語・
説話集類にも引かれる。古くから哀傷歌として認知されてきた歌
である。そのため、天皇を残して先立つ定子の悲嘆が、稚児のそ
れに重層し、作品の悲哀感を深めている。また、「ふる事とも、
かす／＼にかきて」の部分は、定子の他の遺詠を連想させる。複
数の古歌の存在は、一首だけの『花の縁』よりも、死別の悲しみ
を深くする。

『鳥部山』ではそのうえに、「日かけまつ……」歌が加えられ
る。「はかない命は惜しくないが、あなたに逢えないで死ぬこと
が悲しい」という死にゆく者の思いも、定子の歌と同様に、残る
者への執心が、自己の命に対する諦めよりも強く出ている。した
がつて、著名な古歌を引き、複数の「ふる事」を設定し、それに
自身の詠草を加えた『鳥部山』は、同じ基調の歌によって、「藤
の弁」の「民部」に対する恋情を明確にうちだす。『花の縁』は、
和歌自体の悲哀感も薄く、それを増幅させる措置もなされていな
いため、恋人に先立つ悲しみが、『鳥部山』ほどには明らかにな

らない。その一方で、恋人と逢えない現世での生存を厭い、それよりは死を願う歌は、『をぐら物語』の「初花」に似かような情念の激しさを想起させる。「初花」は恋人との仲をさかれて親に勘当を受けるときに、迷わず自害を決意した。これは『鳥部山』には存在しない新しい感情である。

②鳥部山

男は「おしからぬ命を、なきが為に捨む事を。ひたすらに、おもひこめ」て日を過し、初七日に恋人の両親や乳母とともに、「鳥部山」に赴く。そこで次の歌を詠む。

君があたりの草に、おもひ消なん命のほど。中／＼いまは、うれしくおぼへて

きえぬめる、雫も露も、玉さゝの、よにのこるべき、物にやはある
『花の縁』

君かあたりの、草の葉に、おもひきへなむ、いのちのほとも、なか／＼いまは、うれしくて

さきたちし、鳥部のやまの、夕煙、あはれいつまで、きののこれとか

父の卿

さきたちて、きえし浅茅の、末の露、本の雫の、身をいかにせむ
『鳥部山』

『花の縁物語』の作中歌

『花の縁』の歌が「すゑのつゆもとのしづくや世中のおくれさきだつためしなるらん」(『新古今和歌集』巻八「哀傷歌」僧正遍昭)を下敷きにしていることは、容易に考えられる。草木の末葉の露と根元の雫は、遅速はあるがどちらも落ちてしまうように、時間の差はあつても人はやがて誰もが死んでしまう。それが人の世の常であると言う。命のはかなさを詠んだ歌である。『花の縁』は「露」と「雫」を自分と恋人にたとえ、その行く末を、下句で「何物も現世に永続するものは存在しない」と、強く言いきる。これは「おもひ消なん命のほど」を「うれしく」と表現する地の文とともに、死を覚悟した男の現世への末練を断ちきつた潔さと、来世での再会を庶幾する心情を表す。ここには本歌のような無常観はない。御伽草子・仮名草子の恋物語の常套手段でもある恋人の菩提供養を考えることもなく、ひたすら死を願う心は、二世をかけての恋の成就に対する強い決意を示すものと言えよう。『花の縁』では、「左京」は恋人の墓に香華を手向け、墓前で自害して果てる。このような展開からも、当該歌には、「末の露」「本の雫」から発想される無常観とは異質な、恋への執着が秘められている。ところで、「鳥部山」の茶毘の煙に死者を思う歌は数多い。たとえば勅撰集では、「おもひかねながめしかどもとりべやまてはけふりもみえずなりにき」(『詞花和歌集』巻十「雑下」円融院御製)「けふりだに仕はしたなびけとれりべやま立わかれにしかたみともみむ」(『千載和歌集』巻十九「釈教」寂然)などがある。『鳥部山』の「民部」の歌に本歌・類歌を想定することは

難しい。それでも、「先だったあなたのような鳥部山の茶毘の煙は、わたしにいつまで現世に残れと言うのだろうか」の歌意には、前述の歌と同様に、残された身の悲しみがうちだされている。そのため、死への願望は、『花の縁』ほど直接的には描かれていないのではないか。

「父の卿」の歌も、来世希求とは逆の方向性をもつ。当該歌も「すゑのつゆ……」歌が発想の基層にある。『花の縁』とは異なり、ここでは「末の露」を「藤の弁」に、「元の雫」を「父の卿」にたとえる。それによって、親が子に後れる逆修の縁の悲しみを訴える。「民部」の歌だけであれば、『花の縁』のように恋への執着も考えることはできよう。しかし、「父の卿」の歌は、それとはあいまいな悲痛な死別の苦悩である。したがって、『鳥部山』の和歌は、主人公の死の決意を示す場面でありながら、恋人との来世での再会を予想した喜びよりも、現世での別れの辛さや悲恋のはかなさを強調していると言える。

『花の縁』と『鳥部山』とは歌の想は大きく異なる。『鳥部山』は露の世に展開する恋のはかなさや、愛別離苦の苦悩を、和歌の心情にこめる。この発想は、恋を成道の機縁とする稚児物語では、当然と言える。『花の縁』はこれを継承してはいない。悲恋の枠組みのなかでも、恋を肯定し、積極的に謳歌しようとする心象が、つねに和歌の基層にある。それはときとして、妖しの恋を思わせる古典世界や艶麗な歌謡の情感までも、作品に重層さ

せる。また、同時期の仮名草子に見られる享楽精神や、情念の激しさにもつながらせる。しかし、一方では、それは悲恋の構図に破綻をもたらす。また、恋の表象の中心をなす要素にも問題が多い。恋文は御伽草子風の古い形式であり、後朝の情趣は希薄である。恋に積極性をもったはずの女主人公は、別離の場面では個性を失う。このような難点を内在させながらも、『花の縁』の作中歌は、原作とは異質の、好色憧憬の物語へと、作品を導いている。これは当該作が「中世風恋物語」でありながらも、御伽草子とは異なる系譜の作品であることを示す一証左となろう。

なお、『鳥部山』の最後には、「民部」の再出家の心情を示す和歌が配される。当該歌の意義については、作品の結末に関する別稿で考察したい。

注

(1) 田中伸「『花の縁物語』解題」『二松学舎大学人文論叢』3
／1971年6月／二松学舎大学人文学会。

(2) (1) 田中論文、安藤武彦『日本古典文学大辞典』『花の縁物語』解題／岩波書店。また、拙稿『花の縁物語』と「東山」の恋——「見そめの場」改変の効果と意味——『日本文藝学』37／2001年2月／日本文芸学会。では「出会いの場」の意味を、『花の縁物語』と旅——時好性の内実——『近世初期文芸』18／2001年12月／近世初期文芸研究会。では「道行」の興趣を論じた。

(3) (1) 論文。以下注記しない場合は、田中氏の説はこの論文による。

(4) (2) 拙稿『花の縁物語』と旅。

(5) 以下注記しない場合は、作品梗概部分の引用は、『花の縁物語』本文である。

(6) 北村季吟『続後撰和歌集口実』巻一の当該歌の注釈には、「人」についての言及はない。

(7) 森山茂氏は、和歌の力が他者を動かす和歌威徳を十種に分類し、その一つに「愛情獲得深化回復の徳」をあげる(『尾道短期大学紀要』26/1977年10月/尾道短期大学)。たとえば『物くさ太郎』では、「太郎」は女房の詠む「思ふなら……」の歌に魅惑されて後を追う(浅見和彦『物くさ太郎』の歌より)/日本文学研究資料叢書『お伽草子』/1985年/有精堂)。「鉢かづき」では、湯殿の火を焚きながら歌を詠む異形の「鉢かづき」を見て、「宰相殿御曹司」は恋におちる(上岡勇司・劉少英「御伽草子における和歌の位置——「鉢かづき」を中心に——」/『北海道教育大学紀要』43巻02号/1993年12月/北海道教育大学)。

(8) 『源氏物語』以降「夕暮れと散る桜との組合せに無常を詠む歌がしばしば見られる」という指摘がある(原岡文子『源氏物語』の桜——禁忌の恋をめぐる——)/『国文学 解釈と教材の研究』46巻05号/2001年4月/学燈社)。当該歌もこの範疇にはいる。

(9) (2) 拙稿『花の縁物語』と「東山」の恋。

『花の縁物語』の作中歌

(10) 「もろ人の花さくはるをよそにみてなほしぐるるはしひしほのそで」(『千載和歌集』巻七「雑歌中」中納言長方)などがある。当該歌の詞書には「傍臣どもかかひし侍りけるをききて」とある。

(11) 『古今和歌六帖』第五「雑思」にも同じ和歌がある。作者は「やかもち」とされる。

(12) 『伊勢物語』第四十九段の「うらなく」については、「素直に」「幼く」の解釈(片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典増訂版』P339/1999年/笠間書院)と、「心に隔てなく」(福井貞助氏『日本文学全集』『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』P175/1972年/小学館)「安心しきって」(竹岡正夫氏『伊勢物語全評釈』P783/1988年/右文書院)の解釈があるが、『花の縁』では、前者の解では贈歌を受けての歌意がつうじない。したがって後者の意で考える。なお、古注釈では、「うらおもてなきなり」(『直解』)「底に徹してか様におぼしいれたる心」(『伊勢物語疑義抄』)などと解する。

(13) 「篠之丞」の最初の恋文は長歌形式であるが、「初花」の返事や後朝の文には、和歌だけのものが使われる。

(14) 「月をかたみの別れ」の発想は、「つらしとはおもふものからあかつきのわかれのみこそかたみなりけれ」(『万代和歌集』巻十二「恋歌四」脩門院大式)「そでうへになるも人のかたみかはわれとやどせる秋のよのつき」(『六百番歌合』「恋部下」六番左 女房)などにも見られる。

(15) 他に『閑窓撰歌合』『新三十六人撰』『現存卅六人詩歌』『六華和歌集』『三十六人大歌合』『洞院撰政家百首和歌』など。作者は「藻壁門院少将」とある。

(16) 他に『万代和歌集』『三十六人大歌合』『新時代不動歌合』『落書露見』『六華和歌集』『題林愚抄』『新三十六人撰』など。作者は「藤原光俊朝臣」である。

(17) 「ながむれば恋しき人のこひしきにくもらはくもれ秋の夜の月」(『金葉和歌集』巻七「恋部上」藤原基光)「涙にくもらばくもれなかなかに人はこぬ夜のそでの月かけ」(『建武三年住吉社法楽和歌』大江朝臣広秀) などがある。

(18) 湯浅佳子氏によると、「薄雲の前」は、伝統的な恋物語とは異なり、女性から男性へ恋をしかける新しいタイプの女性として形象化される(『二松学舎大学人文論叢』47/1991年10月/二松学舎大学人文学会)。

(19) 「あつき日の名残涼しく袖の上に光をやとす月のタつゆ」(『新明題和歌集』第一六三三歌) などがある。

(20) 「しる人もなきわかれちにいまはとてこゝろぼそくもいそぎたつかな」「かふりともくもともならぬ身なりとも草葉のつゆをそれとながめよ」(『栄花物語』巻七「とりべ野」)。

(21) 御伽草子『若草物語』『桜の中將』『しぐれ』、仮名草子『薄雪物語』『をぐら物語』など。御伽草子(公家小説)で、主人公が恋人と死別した場合に出家遁世するモチーフをもつことは、市古貞次氏によって指摘されている(『中世小説の研究』)

第一章「公家小説」恋愛談/1991年/東京大学出版会。

(22) この感情は、『うらみのすけ』で「雪の前」の後を追う「菖蒲の前」他の女性(主従の情愛)、男色の相手に殉じる『藻屑物語』の「北川采女」や「竹斎」の「北野社」に描かれる「播磨侍」などにも見られる。近世初期の武家社会に流行していた殉死の精神につうじると考えられる。

※『花の縁』『鳥部山』の本文は『室町時代物語集成 十』(角川書店)に、和歌は『新編国歌大観』(角川書店)によった。

(とみだ・なるみ 梅花女子大学非常勤講師)